

『伊豆の頼朝』

詞章・現代語訳

作詞・節付 八田達弥・安田登

登場人物 源頼朝、北条政子、北条時政、源氏の郎党（数名）

山木兼隆、堤信遠、平家の郎等（数名）

頼朝「これは先の兵衛佐源の頼朝とは我が事なり。さても父義朝は平治の乱れに打ち負け給ひ。我らも力なく伊豆の国に移され。思ふに甲斐なく年月を送る。さる間このほど高倉の院より国々の源氏にご令司あり。とく相国入道^{しゅうくわい}を御討ち申せとの御事にて候。また今朝文覚^{もんかく}の申し候は。都より重ねての院宣を賜りて候程に。急ぎこのこと談合申さばやと存じ候。

頼朝「いかに時政殿。これはゆゆしき一大事にて候程に。

御心中の通りを御意見御申しあらうざるにて候。

時政「これはまさしく頼朝の流罪を免ぜられ。却つて平家を討つべき論言にて候。かかるめでたき事こそなけれ。急ぎ都へ御上りあり。朝敵平氏を平らげて。君の御心をも慰め給へ

地謡「げにや紅は園生に植えても隠れなし。

頼朝「我はたとせ余りを伊豆に過ごし。北条殿安達の盛長。

佐々木兄弟をはじめとして。はやち力の者も八十余騎。

地謡「その勢いまだ足らざれども。いづれ当千の強者ども。

頼朝「まずは平家の所の目代。山木の判官兼隆^{かねたか}を。やがて討たんと勇み一つ。

地謡「聞の声をぞ。拳げにける

地謡「時は治承^{じしやう}の夏の頃。時は治承の夏の頃。よし

狩野川の源も。清き流れを汲みて知る。そのもののふの手束ろ。

地謡「伊豆山権現三島の神。列して都の男山を。遙かに

望みて礼拝すれば。もとより。氏の御神なれば

政子も祝ひの言の葉を。八幡の御前に奉る

政子「思ひ数ふる万代は。

地謡「神ぞ知るらん。我が君のため。中之舞

地謡「かくては時刻も移りなん。疾く立ち給へと奏すれば。

寄すべきみぎんも今なりと。頼朝「はものに下知し一つ。

山木を指して進みけり。山木を指して進みけり

頼朝「これは前の兵衛佐源頼朝である。父義朝は平治の乱に負け、私も伊豆に流罪となり、どうする事もできないまま年月を送った。ところがこのほど高倉院から各国の源氏に命令が下り、急いで平清盛をお討ち申し上げよとの事です。また今朝文覚が言うことには都より後白河法皇の新しい命令を頂いたとの言なので急いでこのことを相談しようと思ひます。

頼朝「時政殿これはゆゆしい一大事であります。お心の通りを
ご意見ください。

時政「これはまさに頼朝の罪を許され。平家を討てという命令です。これほどめでたい事はありません。急いで都へ行き、天皇の敵である平氏を退治して法皇の心配を取り除くべきです。

地謡「隠そうとして草むらの中に植えても紅の花は必ず目立つものだ、ということわざはこのことであろう。

頼朝「私は二十年以上をこの伊豆で過ごし、そのあいだに北条殿や安達の盛長。また佐々木兄弟をはじめとして、この頼朝に味方する武士も八十人を数えるようになった。

地謡「その人数はいまだ十分ではないが、誰をとって見ても一人で千人を相手に戦えるほどの勇者ぞろいである。

頼朝「まずは平家のこの伊豆の代官、山木兼隆をすぐに倒そうと勇みたつて…

地謡「みんなで威勢のよい声をあげるのだった。

地謡「これは治承の夏のころ。狩野川の源に清流があるように、頼朝の祖先をたどれば清和天皇がいらつしやる。その天皇をお守りする武士として弓を手に取つて。

地謡「伊豆山の権現さま、三島の神さま。わけても都の男山石清水八幡神社を遙かかなたに見て礼拝すれば、もとより源氏と北条の氏神であるから政子も神を寿ぐ和歌を八幡神に奉るのだった。

政子「思いを重ねる長い年月も

地謡「我が主君のためであることは神はご存知であろう

地謡「こうしているうちにも時間は過ぎて行く。急いで出立なさつてくださいと申し上げると、頼朝も押し寄せる時期は今こそだ、と武士どもに命令を下し、山木を目指して進んで行くのだった。

兼隆・郎等「名をも揚羽の御世なれや。名をも揚羽の御世なれや。変はらぬ誓ひ仰ぐなり。」

兼隆「これは平家の一門伊豆の国の目代に。山本の判官兼隆なり。いかに誰かある。」

堤信遠「御前に候。」

兼隆「今夜は三島の社のご祭礼なり。郎等は皆々参詣にまかり出でてあるか。」

信遠「さん候ことごとくまかり出で。我らばかり宿直仕りて候。」

兼隆「げにげにさぞあるらん。我らもここに内居して。」

いざや酒宴を始めうざるにて候。

信遠「かしこまつて候。」

地謡「神の答めも白波の。さすや廬山の盃をいざ諸共に愛せん。」

頼朝・武士「寄せかけて。たちまちの月も色添へて。」

日の行く道をも。翔らばや。

兼隆「あれを見よ敵大勢押し寄せたり。そも何者なれば平家の目代。兼隆に向かひ弓引きけるぞ。」

頼朝「そもそもこれは。清和源氏の流れを汲み。兵衛佐頼朝なりと。大音あげてぞ。呼ばはりける。」

地謡「山本の館はどよめきて。山本の館はどよめきて。宿直の侍打ち物おつ取り。切つてかかれば味方の勢は。をめき叫んで。戦ふたり。」

〈武士の戦い〉

兼隆「あら物々しや。頼朝よ。」

地謡「あら物々しや頼朝よ。いでもの見せんと打ち物抜き持ち。かかりければ。頼朝少しも騒ぎ給はず。重代なりし。太刀抜き放ち。隙間をあらせず戦ひ給へば。兼隆かなはじと退きけるを。頼朝進つ詰め切り払ひ給ひ。打ち物取り落とす倒れ伏すを。その時大勢縄打ちかけて。引き立て行くも。思へば源氏の竜胆の。思へば源氏の竜胆の花の。栄ゆく御世の門出なり。」

※著作権は作者の能楽師および伊豆の国市能友の会に帰属します。

※本文の無断使用を禁止します。

兼隆・武士「揚羽蝶の家紋の平家こそいまの世の中で名を知

られている。清盛さまに仕える誓いは変わらないぞ。

兼隆「これは平家の一門の一人で伊豆の国の代官を任されている山本の兼隆である。誰かいるか。」

堤信遠「おそばにおります。」

兼隆「今夜は三島大社のお祭りだが家臣はみんなお参りに行つたか。」

信遠「その通りみんな出発して私たちはばかりが当直しております。」

兼隆「そうであろう。我々も今日はここに集まつて宴会を始めよう。」

信遠「かしこまりました。」

地謡「神様の罰があるとも知らず、お互いにお酌をしながらさあお酒を飲むことにしよう。」

頼朝・武士「押し寄せてみれば十七日の夜の月も明るい。」

これからは罪人ではなく太陽の下を堂々と歩いて行くのだ。

兼隆「あれを見ろ、敵が大勢押し寄せて来た。平家の代官の兼隆に向かって弓を引くとは、お前は何者だ。」

頼朝「これこそ清和源氏の子孫の兵衛佐頼朝であると、大声で名乗った。」

地謡「山木の屋敷は大騒ぎとなつて、宿直の武士は刀を取つて切りかかれば味方の武士は、叫び声をあげて戦うのだった。」

〈武士の戦い〉

兼隆「なんと物々しいことよ、頼朝め。」

地謡「物々しいことだ頼朝め。目にも見せんと刀を抜き持ち切りかかれば、頼朝は少しもあわてることもなく家に伝わる太刀を抜き、隙を見せず戦つたところ、兼隆はかなわないと思つて逃げ出すところに頼朝は追いつめてまた切り払い、刀を落として倒れるところに、その時大勢が集まつて縄をかけ、引つ立てて行くのも、思えば源氏の家紋の竜胆の花が咲くように、のちに源氏が栄えた世の中もこのときの合戦がその始まりだったのである。」